

# 社会科授業実践研究会報告

深 田 達 彦

桐朋女子中学校・高等学校

Practical Teaching in the Field of Social Studies

Tatsuhiko Fukada

Toho Girls' Junior & Senior High School

キーワード：中学社会（地理的分野）、東アジア、問題解決、ウェビング

## I. はじめに

周知のとおり、2021年度4月1日より中学において新学習指導要領が全面实施される。新指導要領ではすべての教科の目標、内容が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱に基づいて再整理されており、なかでも「思考力、判断力、表現力等」を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が期待されている。2020年4月現在、私の所属している中学校第2学年はちょうど対象学年にあたるため、十分に新指導要領を意識した授業を行なっていく必要がある。このことを踏まえたうえで、以下に2019年11月14日に行なわれた授業実践研究会の報告をする。

## II. 概要

研究授業は中学校第1学年D組を対象に行なった。先述したように、当該学年は新指導要領の対象であり、高等学校においては「探究学習」が重視される学年である。その際、生徒は自らの力で課題を設定し、解決することが求められるが、この力は自然に身につくものではないため、中学校3

年間の学習を通じて養っていかなければならない。そこで、本研究授業は課題解決学習の導入と位置付け、学習課題は教員が設定することにした。また、課題解決のために必要な情報は研究授業までに与えておき、生徒はそれらの情報を活用しながら個別の活動やグループでの活動を通じて課題の解決を図るものとする。

研究授業における学習单元及び学習計画は以下のとおりである。

### 【学習单元】

社会科（地理的分野）

「世界の諸地域：東アジア」

### 【学習計画】

第1時 中国の自然と農業

第2時 巨大な人口、多様な民族

第3時 発展する工業

第4時 スマホ（スマートフォン）

製造大国中国……本時

今回の学習单元である東アジアは世界地理に入って初めて扱う单元であり、日本地理以上に生徒の馴染みは薄い。そこで、できる限り生徒が興味を持ち、自分自身に引きつけて考えられるよう、学習課題は「な

「なぜ中国はスマホ製造大国になったのか」と設定した。また、課題解決のために必要な情報は、第1時から第3時を利用して予め生徒に与えている。具体的には「広大な土地」、「豊富な資源」といった自然条件と、「巨大な人口」、「社会主義」、「経済特区の設置」といった社会条件、制度条件などである。

生徒たちはこれらの情報を活用して大きく2つの観点から課題に対する解答を示す必要がある。1つは中国がスマートフォンを「つくる場所」として適していることである。巨大な人口ゆえに豊富で安価な労働力が手に入りやすく、広い土地と豊富な資源も獲得できるだけでなく、外国企業は経済特区において減税の恩恵を受けられる。そのため、外国企業の進出が相次ぎ、中国が「世界の工場」になっているのである。もう1つは中国がスマートフォンを「売る場所」としても適していることである。豊富な人口を抱えている一方で、近年経済

成長が著しい中国は市場として高い有益性を持っている。これらのことに気づき、まとめることができれば、今回の学習課題を達成できたと言える。

ただし、課題解決学習の初学者ともいえる中学1年生に情報だけ与えて解答を作成させるとするのはやや難度が高い。そこで本研究授業では解答を導くための手法としてウェビングを用いた。ウェビングとは、思考の対象となるキーワードから連想される言葉や情報を書き出し、つなげていくという発想法の1つであるが、ここでは関連するキーワードどうしを結びつけ、整理する思考法として用いた。授業では、最初に学習課題の確認とウェビングの進め方について簡単に説明した後、グループごとにウェビングによる構造図を作成させた。構造図が完成したところで、課題に対する自分なりの解答をまとめさせ、最後にそれを発表させることにした。参考までに、以下に当日の学習指導計画を示す。

|           | 学習活動   | 留意事項  |
|-----------|--|---|
| 導入<br>5分  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主題を確認する。<br/>(なぜ中国はスマホ製造大国になったのだろうか?)</li> </ul>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 改めて中国がスマホ製造世界一であること、今まで学んだことを活用して解答を導くことを伝える。</li> </ul>   |
| 展開<br>35分 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ウェビングについて理解する。</li> <li>・ グループをつくり、ウェビングを活用して主題に対する解答を導くための構造図を作成する。構造図は中心を「中国」とし、その周囲に学んだことを関連づけて配置することで、中国とスマホ製造とを結びつけていく。</li> <li>・ 構造図の文章化。グループで作成した図を自分なりに文章でまとめる。(個人ワーク)</li> <li>・ 発表。構造図を示しながら、自分が作成した文章を発表する。その際、グループでの考察で挙がっていない視点からの言及があればそれも記録する。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ウェビングは複数の視点から物事を考察するとき役に立つことを伝え、具体的な事例を挙げてその手法を説明する。</li> <li>・ 「まなボード」を使用させる。</li> <li>・ 教員は机間巡視をおこない、進捗状況を把握。思うように進まないグループには声かけをする。進度が早いグループには、発展課題として教科書P47資料5の分析をさせる。(発展課題については時間があれば説明を加える)</li> <li>・ 主題に対する解答をまとめさせる。その際、主語を明確にするよう促す。また、あらかじめグループ内で発表者を決めさせておく。</li> </ul> |
| まとめ<br>5分 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 主題に対する解答が1つではないこと。複数の視点から物事を捉えることの重要性に気付く。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生徒の構造図を活用して、主題に対する解答を導くための視点を再確認する。「人口」や「改革開放」など複数の視点から考察できることが望ましい。</li> </ul>  |



写真1 グループ活動の様子。積極的に話し合いができている。

### Ⅲ. 成果と課題

実際に研究授業を行なってみて、いくつかの成果と課題が明らかになった。

まず成果であるが、グループでの活動はほとんどの生徒が積極的に参加できていた。これは、研究授業の対象クラスであったD組が普段から話し合いなどの活動に活発に取り組めるといふ性質を持っていることにも起因するが、一方で、取り組むべき課題を単元の最初に明確に提示し、常に意識づけしていたことが大きかったと考えられる。また、活動の際に教具として「まなボード」を使用したことも良かった。これによって、生徒は考えたことをその場で書いたり消したりしながら話し合うことができたので、ウェビングには非常に相性が良いことがわかった。さらに、グループでの活動を経たうえで、各個人に課題に対する解答を作成させたので、全員が構造図を参考にしながら自分なりに文章を書くことができた。さすがに先述した2つの観点から説明した解答はほとんど見られなかったが、どちらか一方の観点を押さえることはできていた。本研究授業が課題解決学習の導入として位置付けた授業であることを踏まえれば、十分及第点の成果だといえよう。

一方で課題としては、まず「活動にかかる時間」が挙げられる。今回の場合、45分間の中に「グループでの活動」、「個人での活動」、「発表」、「まとめ」と展開を豊富に用意していたため、ひとつの活動にかかる時間は長くても15分であった。本来であれば2時間続きの授業で扱うような内容であるので、そもそもの時間設定に難があったともいえるが、それにしても実際に授業を行なってみると、思いの外グループでの活動に時間がかかってしまった。活動終了時刻は伝えてあったのだが、話し合いに集中してしまうあまり、時計を意識しながら時間内にまとめることができなかったようである。その結果、研究授業は個人に文章を作成させるところで終了となってしまった。最後に早く終了した一人に発表させたが、それをフィードバックし、全体でまとめをするという展開は次回にまわすことになった。

次に生徒の成果物を分析してわかった課題を挙げる。以下に示すのはあるグループが作成したウェビングによる構造図である。これを見ると、授業で獲得した情報を挙げ、関連するものを線で結びつけることはできている。しかし、例えば「工業が盛ん→資源が豊富→広大な土地」という結線をたどると、確かに関連性はあるがそれらの因果関係までは意識されていないことがわかる。

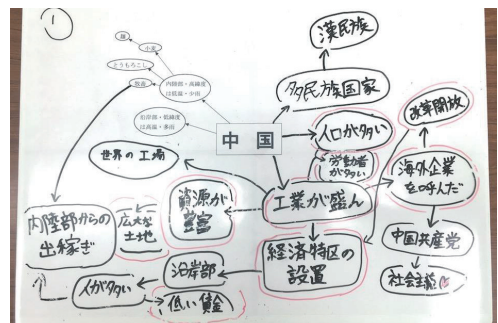


写真2 ウェビングの例

本来であれば、ウェビングは連想ゲームに近いので、「中国」を中心に据えればそこから連想される要素として「人口の多さ」や「広大な土地」がまず挙げられるはずである（実際、「人口の多さ」は「中国」から結線されている）。そうすれば、「広大な土地」から「豊富な資源」が連想され、そこから「工業が盛ん」であることが連想されるので、図を作成していく中で因果関係も同時に満たすことができるはずであった。ところが、事前に情報を与えていたがために本来であれば後から出てくるはずの情報が先に出てきてしまい、結果的に因果関係が崩れてしまったのだと考えられる。

また、以下の文章を見てほしい。これらはこのグループで活動した2人の生徒が作成したものである（なお下線部はわかりやすくするために筆者が加筆・修正を加えた箇所である）。

生徒 A：豊かな国にしたいと考えた中国共産党は、自分達の国にはたくさんの人がいて、豊富な資源がとれる広大な土地があるということを利用して改革開放を行った。それは海外企業が中国で工業を行いやすくしたもので見事たくさんの海外企業を呼びこむことに成功した。海外企業の立場からすると低い賃金でたくさんの人をやとえるので工場がたくさんできた。工場がたくさんできたことによってスマホを作っている所も増え、結果的に、スマホ大国になった。

生徒 B：中国は、改革開放で海外企業を呼んだ。海外企業は、（中国が）労働者が多く、労働者の賃金も安く、

広い広大な土地や資源が豊富にあり、また、経済特区では、海外企業に利益があるため、世界から来ている。そのため、中国の資源を利用したり、輸入したスマホの部品を1日に何千個も使用したりできるため、スマホ製造大国になった。

2つの文章を見ると、作成した構造図を活用しきれていないように思える。授業では、できあがった図の結線をたどりながら文章化することで、課題に対する解答が完成すると説明した。しかしながら、それはウェビングによる構造図が因果関係も満たしていることが前提であった。今回のように、因果関係が崩れた図になってしまうと、説明の際に自分でそこを補完することになり、結果的に構造図から離れてしまうのだと考えられる。もちろん構造図どおりである必要も、複数の生徒の解答が同じである必要もないのだが、図を活用して文章を作成してほしかったので、やや残念であった。

#### IV. おわりに

本研究授業で明らかになった課題を払拭するためには、日頃からグループでの活動や課題解決学習を行ない、それに慣れさせておく必要があるだろう。そうすることで時間内にまとめたり、図を活用したりする力は次第に養われていくはずである。また、因果関係は新指導要領においても歴史的分野の「社会的な見方・考え方」の1つとして挙げられており、今後ますます重要になってくる。そのため、日々の授業の中で因果関係を意識した展開を心がけ、生徒に定着させることが大切である。

幸いにも、現在中学2年生の生徒たちが、

高校生になって本格的に「探究学習」を始めるまでにはまだいくらかの猶予がある。今回の研究授業を一過性のものにせず、継続して取り組むことで生徒たちは多くの力を身につけることができるはずである。課題も見られたが、一方で成果も十分にあった。学びへの意欲や積極的に活動する姿も見ることができた。生徒たちの潜在的な力を信じ、それを引き出し伸ばしていくべく、今後も教育活動に励みたい。